ともに担い　ともに築く　女と男の情報誌

ねっとわぁく

2014/3/10　Vol.63

静岡県

女と男のいい関係

INDEX

●女と男の結婚観 2
●はじめて出会った6人の鍋座談会 5
●婚活・僕らの場合 9
●それって恋愛？ 11
●より良い関係を築くために知っておきたいことがあります 13

女(ひと)と男(ひと)のいい関係

創るために　知っておきたいこと

産声を上げてから 30 年、『ねっとわぁく』は、63 号目を迎えました。この間、男と女を取り巻く環境は大きく変容しました。女性の就業率は 63.2%（平成 25 年 12 月 総務省統計局・労働力調査）と飛躍的に伸び、女性の生き方も家庭中心から、ライフステージに応じた多様な生き方が選択できるようになりました。また、「イクメン」に代表されるように育児に積極的に携わる男性も確実に増えています。

一方で、非正規雇用労働者は、男性が 22.5% に対し、女性は 58.3%（平成24年 厚生労働省・国民生活基礎調査）、賃金格差も女性は男性の 71.3%（平成25年 厚生労働省・賃金構造基本統計調査）と、雇用における男女間格差は是正されることなく続いています。

「男女共同参画」が叫ばれながらも一向に改善しないジェンダーによる様々な格差に直面し、今回、取り上げるテーマは、「女と男のいい関係」です。価値観の多様化した現代でも普遍的な恋愛と結婚にスポットを当てます。「女と男の結婚観」では30年間の調査データから結婚観の変化を読み解き、「鍋座談会」では、現代の若者の恋愛観、結婚観について大いに盛り上がりました。「婚活」では、今はやりの婚活パーティーに迫りました。そして最後に「女と男の関係が悪化」した時、問題となる DV について取り上げています。中・高生の間でもデート DV が深刻化し、社会問題化する今、すぐに役立つ情報も掲載しました。

30年間の調査データから結婚観の変化を読み解く

女と男の結婚観

結婚観は、時代とともにどのように変化してきたのでしょうか。国立社会保障・人口問題研究所は、60年にわたり18歳～34歳の未婚男女を対象に結婚と出産に関する調査を行ってきました。その中から、過去30年間の調査結果を基に結婚に関する動向を探ってみました。

■独身者の結婚願望

結婚のメリット

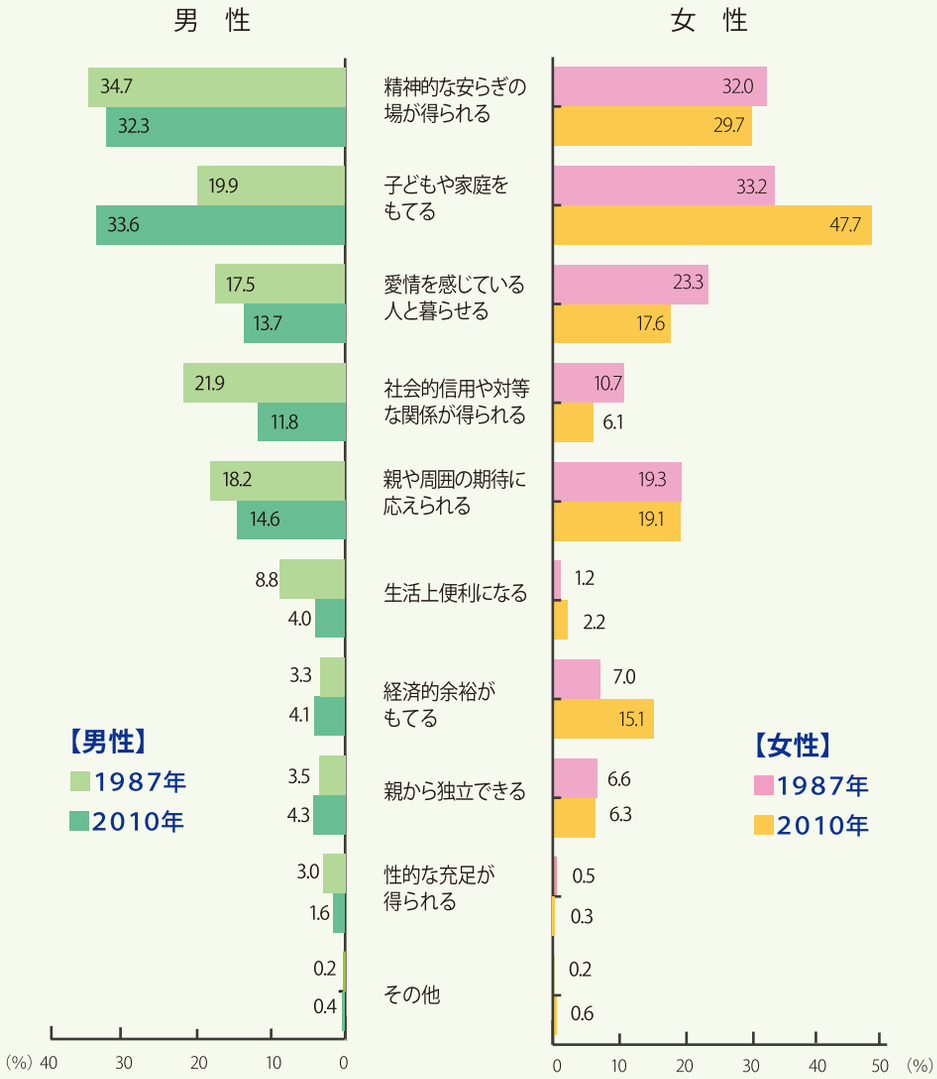
独身男女の「結婚の意思」についての調査（グラフ1）をみると、男女とも「いずれ結婚するつもり」が未婚者の9割近くを占め、結婚についてはどの時代の男女も前向きに捉えていることがわかります。つまり、**結婚願望は決して衰えているわけではありません。**

「結婚することのメリット」について興味深い調査データがあります。（グラフ2）

1987年の調査では、男女ともに**「精神的な安らぎ」**を結婚のメリットにあげています。さらに男性は**「社会的信用を得る機会」**として結婚を捉えています。

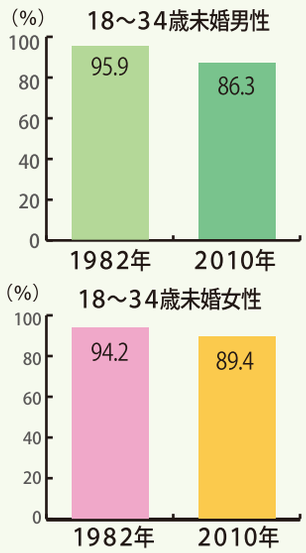
しかし、2010年になると男女とも**「子どもや家庭がもてる」**という理由が突出してきます。さらに女性は**「経済的余裕がもてる」**の割合も増加しており、厳しい雇用環境の影響が結婚に踏み切るかどうかの動機付けとなっていることがうかがえます。

結婚することのメリット（グラフ2）

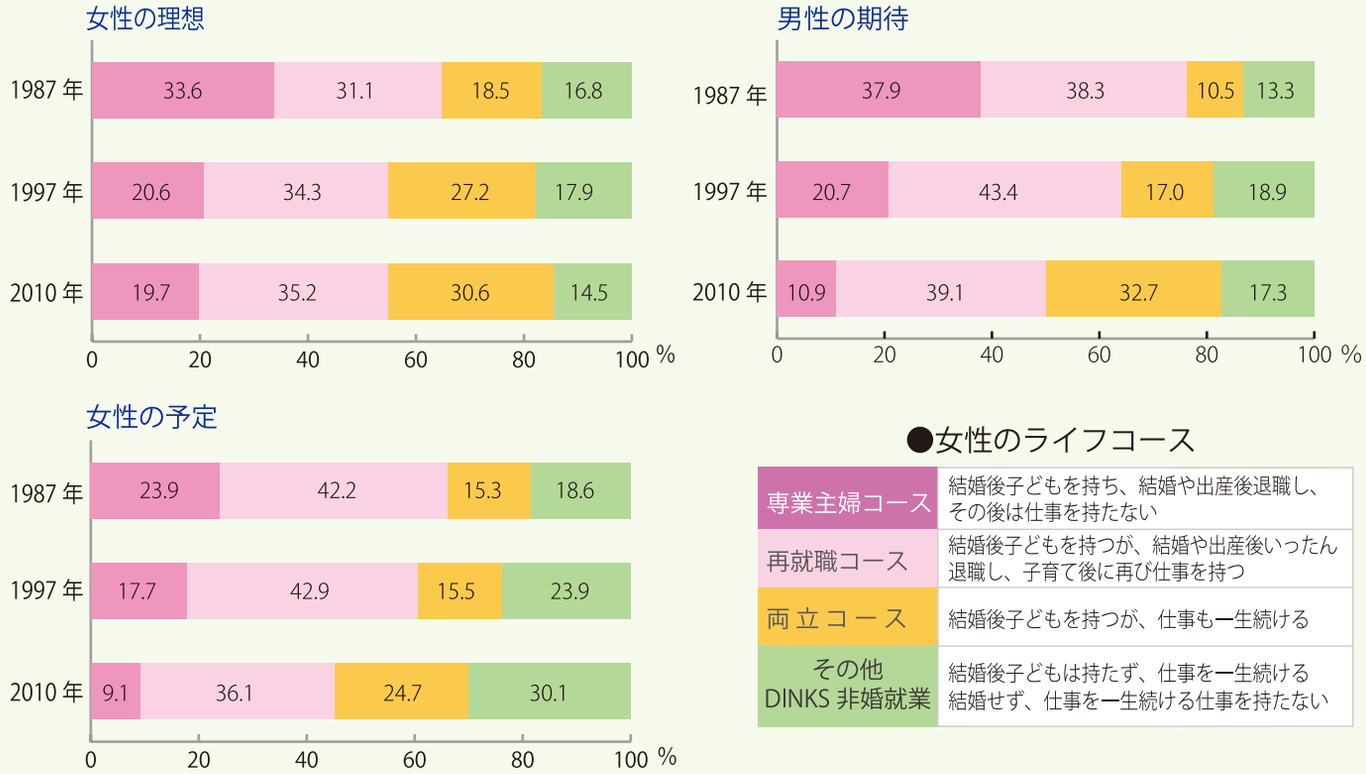


資料：国立社会保障・人口問題研究所『第14回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査』

独身者の結婚の意思
<いずれ結婚するつもりの割合>
（グラフ1）



未婚男女が理想とする結婚像とライフコース （グラフ３）



●女性のライフコース

専業主婦コース	結婚後子どもを持ち、結婚や出産後退職し、その後は仕事を持たない
再就職コース	結婚後子どもを持つが、結婚や出産後いったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ
両立コース	結婚後子どもを持つが、仕事も一生続ける
その他 DINKS 非婚就業	結婚後子どもは持たず、仕事を一生続ける 結婚せず、仕事を一生続ける仕事を持たない

資料：国立社会保障・人口問題研究所『第 14 回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査』

■理想的な結婚像とライフコース

未婚男女が理想とする結婚像とライフコースはどのようなものでしょうか。グラフ３は、女性が理想とするライフコースと現実的な選択、また男性が期待する女性のライフコースについての変化を表したものです。

１９９０年代後半、「女性の理想」も「男性の期待」も専業主婦コースが減少し、再就職コース、両立コースが増加しています。**女性は結婚後も働き続けることを希望**しており、**男性も女性に働き続けることを期待**していることが分かります。女性が経済的役割を担う傾向が強まっている表れといえます。

これは、社会の様々な分野で女性の参画が進んだことや、若い世代の経済事情の悪化した結果とも読み取れます。

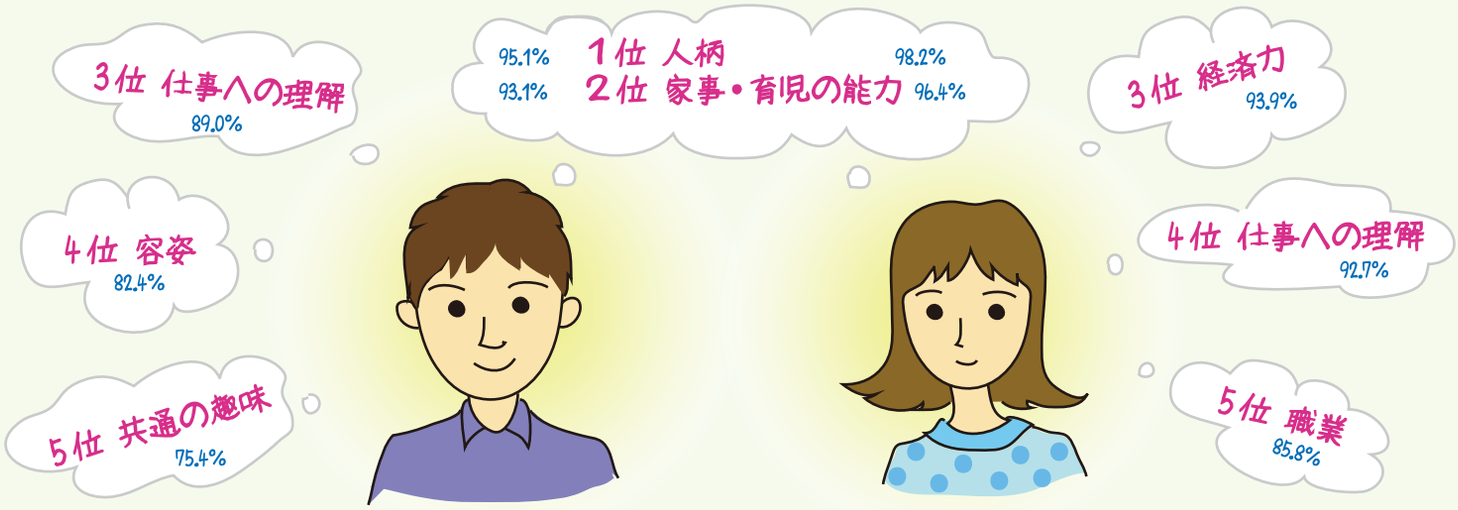
■結婚相手に求める条件

未婚男女が結婚相手に求める条件は、男性と女性では大きく異なっています。女性が**「経済力」**や**「職業」**を重視する割合が高いのに対し、男性は女性よりも**「容姿」**への条件が強い傾向にあることです。

しかし、男女とも最重視するのは**「人柄」**で、この傾向は１９９２年以前から変わっていません。また、１９９０年代後半より**「仕事への理解」**や**「家事・育児の能力」**を重視する割合が男女とも非常に高くなっています。

理想的な生活を維持するためには、男性が妻子を養い豊かな生活を送るという形態から、**共に家事や育児を分担しながら女性も働き続け、経済的な安定を図る**という形態に変化しているのではないでしょうか。

結婚相手に求める条件 ベスト５（数値は 2010 年「重視する＋考慮する」の割合）



■なぜ結婚できないのか

未婚の理由についても調査があります。結婚しない未婚男女にとって、「結婚しない」という積極的理由と「結婚できない」という消極的理由があることが分かります。（表1）

結婚の意思があるにもかかわらず「結婚できない」という理由を一つ一つみると、**「相手との出会いがない」「異性とうまくつき合えない」「結婚資金が足りない」**といった現代の若者を取り巻く社会的、経済的環境の変化や状況が見えてきます。そして、これらの障害が未婚化・晩婚化を促進させているのではないでしょうか。

■おわりに

調査データを基に、未婚男女の結婚に対する考え方の変化について探ってみました。「結婚に対する理想像」、「結婚相手に求める条件」、「結婚への障害」の部分で、経済的な側面が結婚に対する考えを決定付けていることがみえてきます。

「男性が養わなければならない」という**ジェンダーに基づく結婚観**が、男性にとって結婚に踏み切れない要因となり、女性にとっても「男性の経済力」が結婚の条件の重要なポイントになっているのです。

しかし、バブル景気以降の日本の経済低迷による雇用情勢の変化、男性の非正規労働者の増加や雇用不安、正規雇用者の年収の減少等により、「男性が養わなければならない」意識から「男性だけでは養うことが難しい」状況へと変化したことで、ライフコースの変化や、結婚の条件に「家事・育児の能力」が求められるようになったといえます。

（黒田麻紀子）

未婚の理由（表1）

結婚しない理由	
結婚の必然性の希薄さ	結婚するにはまだ若すぎるから 結婚する必要性をまだ感じないから
結婚と競合するものの存在	今は、仕事（また学業）にうちこみたいから 今は、趣味や娯楽を楽しみたいから 独身の自由さや気楽さを失いたくないから

結婚できない理由	
結婚相手の欠如	適当な相手にまだ巡り会わないから 異性とうまくつき合えないから 結婚資金が足りないから
結婚の障害の存在	結婚生活のための住居のめどがたたないから 親や周囲が結婚に同意しない（だろう）から その他

資料：国立社会保障・人口問題研究所『第 14 回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査』

私たちも社会も将来に夢を持とう

未婚化、晩婚化の進行が言われて久しい。今はさらにこの傾向は強まっている。

1944 年生まれの私の頃の結婚は、男性なら 24 歳、女性なら 22 歳を過ぎる頃になるとお見合の話が少しずつ出始め、恋愛の人と合わせると、ほとんどの人が 28 歳位までに当然のように結婚していった。当時の生涯未婚率は、男性 1.4%、女性 1.5%であったが、2012 年の厚生労働白書によると男性 20.1%、女性 10.6%になっている。

なぜこうなったのか

20～ 30 代の人たちは、結婚しない理由を「非正規雇用率が全体で 35.2%、この内 15 ～ 24 歳では約 50%もあり不安定な立場で働いており、年収 200 万円程度では結婚できない」「もっと学業や仕事に打ち込みたい」「異性との付き合い方がわからない」「自由さ、気楽さを失いたくない」「趣味や娯楽に打ち込みたい」などの理由をあげている。さらに日本経済は長期の低迷で 20 年間ほとんど賃金が上がっていない。将来の見通しも立たなく、高齢社会の負担も増しており、将来に対して不安な社会の中にいる。

結婚することに疑問も戸惑いもほとんどなかった私たちの時代とは隔世の感がする。当時だって給料はそんなに高いわけではなかった。物価水準が違うので単純比較はできないが、私が結婚した1973年（昭和48年）の給料は残業を含めて手取り６万円程度、米 10 kg 1600 円、ラーメン 200 円、ガソリンは１ℓ66 円だった。それでもなんとか生活できた。

しかし、今と大きく異なっていたのは、高度成長の真っ只中にあり「将来に対して夢が持てた」ことだった。この年の 10 月に中東戦争があり、ガソリンは 2 倍になり、他の物価も急上昇したが、翌年から２年間は 年に 20 ～ 30%の賃上げがあった。このアップでも生活は苦しかったが「努力すればなんとかなる」ということは、結婚を考える上で大事なことだった。

さらに、地域社会の結びつきももっとあったような気がする。お見合いの話もどんどん持ってきてくれ、結婚すれば地域で祝ってくれた。経営者もそんなに多くの報酬をもらわず、従業員の賃金や雇用を大切にしてくれた。

どうすればいいんだろう

私たちの時代とは社会情勢が大きく変わっており単純に言えないが、特に国際関係が政治、経済から暮らしにいたるまで影響し、日本だけで判断するのは難しい時代になっている。

非正規雇用の増加は、先行きの世界経済情勢が不透明な中では経営安全策の一つかもしれないが、同一労働同一賃金の原則に反しているのであり、労使双方はもっと真剣に取り組むべきである。

少子化対策に対しては、結婚・妊娠・出産・子育てを切れ目なく支援することを早急に充実し、男性の子育てに理解を示すとともに女性の職場での活躍の場を設けてほしいものだ。

親も子どもの育て方に責任を持つことも大切だ。結婚する、しないは本人次第だが、パラサイトシングル（親に依存する未婚者）をつくってはならない。自分が若い時に苦労したから、子どもには苦労をかけたくないという親の気持ちはわかるが、子どもの将来についてもっと深く考えるべきであろう。

若者も将来の人生計画をしっかりと立ててほしい。

若者の結婚応援を

本誌５頁の鍋座談会に出席した若者は全員が「結婚願望」を持っていた。厚生労働白書でも男性 84.8%、女性 87.7%が結婚を考えていると回答している。このことに大きく期待したい。

社会全体で、若者の将来に「夢」を持たせることを積極的に推進したいものである。

（あざれあ交流会議副代表理事　髙部宗夫）